

# インド思想史学会

## 第17回学術大会

### プログラムと発表要旨

開催日：2010年12月25日（土）

会 場：京都大学 本部構内 百周年時計台記念館

お願い：

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 [hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp](mailto:hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp) にお送りくださるだけで結構です）。

インド思想史学会 第17回(2010年度)学術大会のご案内

インド思想史学会第17回学術大会を、以下の通り開催いたします。  
皆様、どうか万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日 2010年12月25日(土)

会場 京都大学 本部構内 百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール I  
TEL 075-753-2285 (昨年とは場所が違いますのでご注意ください。)

(理事会・評議員会 11:30 - 12:30 人文科学研究所本館(新館)1階 セミナー室2)  
(昨年と時間・場所が違います。人文研は本部構内に移転しましたのでご注意ください。)

参加受付 12時30分から 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール I 前  
(地下に生協ショップ・コピー機 [15:00まで]、カフェ、自動販売機などがあります。)

研究発表者および発表題目

司会：小川 英世

13:00 - 13:50 石井 裕(東京大学・博士課程)  
「Kāvya prakāśa の言語機能論について」

13:55 - 14:45 片岡 啓(九州大学・准教授)  
「Dharmottara's Theory of *Apoḥa*」

—— 休憩 ——

司会：井狩 彌介

15:00 - 15:50 西村 直子(東北大学・専門研究員)  
「*ūlba-* と *jarāyu-*」

15:55 - 16:45 岡崎 康浩(三次青陵高校・教諭)  
「サンギータラトナーカラに見られる横笛の記述について」

—— 休憩 ——

司会：

17:00 - 17:50 山下 勤(京都学園大学・教授)  
「ジャッジャタによる『チャラカ・サンヒター』への註釈について」

総会 17:50 - 18:20 (発表終了後、引き続き国際交流ホール I で)

懇親会 18:30 - 20:30 カフェレストラン「カンフォーラ」(京大正門横)にて  
会費：3000円(当日受付) TEL 075-753-7628

インド思想史学会 会長 井狩彌介  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
京都大学人文科学研究所気付  
インド思想史学会事務局  
藤井正人、赤松明彦、横地優子、梶原三恵子  
E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp  
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/  
TEL: 075-753-6949(藤井) / 6958(梶原)

## Kāvyaṣṭhāna no Gomyōkōnōron ni tsuite

石井 裕 (東京大学大学院)

マンマタ (11c 後半) の *Kāvyaṣṭhāna* (KP) は、アーナンダヴァルダナ (9c 後半) の *Dhva-nyāloka* (DhA) とアビナヴァグプタ (10c 末) による *Locana* 註 (L) の説く *dhvani* (暗示表出 *dhv.*) 論の下に従来の諸説を統合して成った *dhv.* 派詩学初の包括的理論書であり、*dhv.* 論が詩学界を席捲する原動力となった。本書はインド詩学の標準理論書としてあまりにも有名であるが、本書に対する真に批判的な原典研究は未だ完成されていないのが実情である。古来 KP は難解な書と言われ、膨大な数の土着註釈文献が存する。現在の KP 理解は基本的にそうした註釈文献の解釈に依存したものであって、事情は *Bhagavadgītā* など他の超有名古典の場合と同じである。マンマタが直接利用した文献を確定し、綿密に比較検討しつつ地道に KP 本文の真意を探ってゆくことが必要であり、その過程において詩学理論発展史を知る上で興味深い事例に行き当たることもある。本発表ではその一例として KP の言語機能論を取り上げる。

*dhv.* 論で言う (1)*abhidhā* (直接表示機能 *abh.*) (2)*lakṣaṇā* (間接表示機能 *lak.*) (3)*vyañjanā* (暗示表出機能 *vya.*) という三種の言語機能全てを初めて包括的に分類定義したのはマンマタである。このうち *vya.* 論については基本的に DhA の所説の整理・要約である。重要なのは DhA が論題として直接取り上げなかった *abh.* 論と *lak.* 論であり、後代に及ぼした影響の点で彼の最も大きな功績と言いうる。

この KP の *abh.* 論と *lak.* 論がムクラ (9c 末) の *abhidhāvṛttimātrkā* (AVM) を下敷きに行っていることは周知である。AVM は言語の意味伝達機能の問題を扱う小論であり、KP とほぼ同じ用語を用いて *abh.* と *lak.* を包括的に論じている。そのため一見すると KP の *abh.* 論と *lak.* 論は AVM の受け売りであるかのごとき印象を受け、実際に両者の関係をそのように理解する研究者もいるが、それは誤りである。ムクラは「*vya.* は *lak.* に包摂される」と考えるいわゆる *bhāktavādin* であり、彼の言語機能論は *dhv.* 論者の承認する *vya.* が不必要なことを証明する意図の下に構成されている。その所説、特に *lak.* 論はそのままでは決して *dhv.* 論に馴染まない。マンマタはそうしたムクラの言語機能論の持つ特性を熟知した上で必要な修正を施し、自身の言語機能論を構築する材料にしたのである。このことは KP において AVM の *lak.* 論を批判する箇所および KP の *abh.* 論と *lak.* 論にほぼ対応する内容を AVM の構成に従って論じたマンマタの別著 *Śabdavyāpāraṅgīkā* (SVV) を参照することで理解される。批判の力点は *lak.* 論に置かれている。

この点について特に KP の本文解釈について古来意見が分かれる *lak.* 分類図式を例に検討すると、KP 本文の最もシンプルな解釈から導かれる分類図式こそがまさにマンマタの真意であることが確認される。この分類図式は AVM のものともポピュラーな土着註の解釈とも異なっているが、実は DhA の断片的な言及から理解される *lak.* 分類図式と基本構成を同じくしている。これは本来 *dhv.* と相容れない AVM の *lak.* 分類図式を、パロディ的意図で用語・文体は保存しつつ *dhv.* に合致するよう組み替えた結果である。

以上を踏まえ *dhv.* 派詩学の流れの中で KP の *abh.* 論と *lak.* 論をあらためて検討すると、それが DhA と L に散見される *lak.* 論と *abh.* 論に基づき AVM の *abh.* 論と *lak.* 論の持つ反 *dhv.* 論的要素を削除・改変しつつ換骨奪胎する形で、その意味論的分析の利点のみを奪い取ったものであることが明らかになる。

Essentially Dharmottara has changed nothing of Dharmakīrti's theory of *apoha*. This is Frauwallner's final evaluation of Dharmottara's theory of *apoha*. Dharmottara is completely dependent on Dharmakīrti. And when Dharmottara does vary in his position, it does not concern new ideas but remains a mere reshaping of his predecessor's view.

Frauwallner's view, however, seems to be incompatible with Jayanta's understanding. Frauwallner has noticed it and comments on it with a quotation of the relevant passage from the *Nyāyamañjarī*. There, Jayanta contrasts two theories of *apoha* by using Maṇḍana's terminologies of error (*vibhrama*). One theory of *apoha*, according to Jayanta, is parallel to the theory of *asatkhyāti* and the other *ātmakhyāti*. As Frauwallner correctly assumes, the former can be ascribed to Dharmottara and the latter to Dharmakīrti, although Jayanta never mentions them by name. Frauwallner initially agrees that Jayanta intends to show a theoretical difference between Dharmakīrti's and Dharmottara's theories of *apoha*. Implicitly dismissing Jayanta's observation, however, Frauwallner concludes that there is no difference of opinion between Dharmakīrti and Dharmottara; and that the difference lies only in the way of understanding and the mode of expression. Again, Frauwallner finds no fundamental difference between Dharmakīrti's and Dharmottara's theories of *apoha*.

But is it the case that Dharmottara's theory of *apoha* is essentially non-different from Dharmakīrti's? Can one conclude, as Frauwallner does, that the difference belongs to a superficial and not a fundamental one? Is Jayanta's observation mistaken or not to be taken seriously? In the following I elucidate this problem by carefully examining the models of *apoha* theory that Dharmakīrti and Dharmottara presuppose.

発生学に関する語彙としての *úlba-* と *jaráyu-* は、ともに Eihaut (母体の中で胎児を包む卵膜), Mutterkuchen (胎盤), Nachgeburt (後産) 等と解されてきた。また, *úlba-* は内側の胎膜 (innere Hülle des Embryos, Amnion 「羊膜」), *jaráyu-* は外側の卵膜 (äußere Eihaut des Embryos, Chorion 「絨毛膜」) とも説明される (cf. PW 及び EWAia ss.vv.)。しかしながら, 卵膜／胎膜は胎児を包む複数膜の総称であり, 胎盤とも後産とも同一ではない。また, *jaráyu-* を絨毛膜に限定すると, 文献の記述と齟齬を来す場合がある。古代のインド・アフリヤの人々の医学的観察が優れていたことは明らかであり, *úlba-* および *jaráyu-* の解剖学的検討により, 当時の医学とその基盤となった生活との実態解明への寄与が見込まれる。

ヒトの卵膜は子宮 (Uterus) と胎児との間に形成される: 脱落膜 (Dezidua), 絨毛膜 (Chorion), 羊膜 (Amnion) である。脱落膜の内側に絨毛膜が, また絨毛膜の内側に羊膜があり, その更に内側には羊水が満たされている。その中に胎児がいる。胎盤 (Plazenta) は脱落膜と絨毛膜との結合によって形成され, 母子を連絡する。

Śatapatha-Brāhmaṇa VI 6,2,15–16 [Agnicayana, Dīkṣā] は, 母子が外側から内側に向かって, 胴体 — 子宮 — *jarāyu* — *ulba* — 胎児という層構造にあることを説明している。子宮と胎児との間に位置づけられる *jarāyu* と *ulba* とのうち, 後者は胎児に最も近接していることから羊膜であると考えてよい。前者は胎盤／脱落膜／絨毛膜の何れか判断できず, 当時の人々がこれらを区別していたかどうかとも疑わしい。また, Veda 散文には, Agni が産まれる際に自分で *ulba* を破ることができなかった, という神話が伝えられている。これは, 家畜の出産を背景としたものと考えられる。ヒトの胎児が頭から分娩されるのに対してウシやウマは胎仔を足から娩出するが, その際, 足は胎仔を覆っている羊膜に包まれており (足胞), これが破れると羊水が排出される (破水)。破水が起きない場合には, 介助者が足胞を破る。このことから, *ulba* は羊膜に相当すると考えられる。ところで, 仔牛は母胎から娩出される時に先述の通り羊膜に包まれており, 出産後に母牛は後産として胎盤, 絨毛膜などを排出する。これらの諸組織を区別する記述が Veda 文献に見られないことから, *úlba-* が分娩時に胎仔を包んでいる羊膜を指すのに対し, *jaráyu-* は後産を構成する胎盤及び絨毛膜等を包括的に指す語である可能性がある。一方, ヒトの新生児は羊膜などに覆われることなく分娩され, 羊膜は胎盤などと共に後産として娩出される。ウシ等と異なり, ヒトの出産では羊膜を認識する機会に乏しいと考えられる。従って, これらの語彙は当時の人々が母子の構造を理解する際に, 人間ではなく家畜を念頭に置くところから出発していた可能性を示唆している。

## サンギータラトナーカラに見られる横笛の記述について

岡崎康浩

横笛(vamśa)は、ナーティヤシャーストラでも第30章がほぼその記述に当てられ、古典期から重要な意味を持つ楽器として知られているが、キールティダラなど失われた同書の注釈の時期から、数本から十数本を一組として低声・中声・高声の3声域を覆う楽器であるとされ、12世紀のバラタバーシャやマーナッソーラーサにも概寸や奏法とともにこうした横笛群の記述が残されている。13世紀にシャルンガデーヴァによって書かれたサンギータラトナーカラ第6章には、以上のような伝統的な横笛群の記述とともに地方の横笛群が4種、頭部、歌口、指穴、その間隔、足部、内径、管の肉厚の詳しい寸法とともに記述されている。横笛が声楽の重要な伴奏楽器とされており、各横笛群の各笛が音階音に対応することを考えると、現在部分的にしか明らかにされていない当時の音律との関係も疑われる。

ここでは、地方の横笛群の一つを取り上げ、その復元実験を行うことで、この横笛群の音律を探り、その実験結果から当時の一般的な音律並びに他の横笛群の性格を考察する。

サンギータラトナーカラに記述された横笛群の復元に関しては、すでにSudhakar Bhatによって一定の試みがなされている(1994)。ただ、Bhatの復元については、寸法の換算等に関わって疑問も残り、また、本来音律との関わりに焦点を当てたものでもない。本研究では、寸法単位について再考し、弦楽器と異なり寸法だけからでは発生周波数が確定しにくい横笛を、材質が均一で工作の容易な合成樹脂を用いて復元し、その発生周波数を測定した。楽器の復元法、発生周波数の測定法については課題も残るが、その結果を用いて同書の記述を再考していく。

## ジャッジャタによる『チャラカ・サンヒター』への註釈について

山下勤（京都学園大学）

インド伝統医学文献『チャラカ・サンヒター』(*Carakasamhitā*)への註釈としては、11世紀頃のチャクラパーニダッタ(*Cakrapāṇidatta*)による『アーユルヴェーダ・ディーピカー』(*Āyurvedadīpikā*)が最も有名であるが、この他にも多数の註釈文献の存在が知られている。これらのうち、現存最古の註釈はジャッジャタ(*Jajjāta*) (*Jejjāta*、*Jaijjāta* または *Jarjāta* と表記されることもある)の作とされる『ニランタラパダ・ヴィヤーキヤー』(*Nirantarapadavyākhyā*)である。この文献は完全には残っておらず、『チャラカ・サンヒター』第6～8巻(*Cikitsāsthāna*、*Kalpasthāna* および *Siddhisthāna*)の韻文部分への註釈が部分的に残っているのみであるが、インド医学文献への註釈のあり方や本文解釈の歴史の変遷、またインド医学文献の成立史を知る上で貴重な資料であり、いまだ校訂版が存在しない『チャラカ・サンヒター』の本文テキストの読みを検討する上でも重要であると言える。

ジャッジャタというカシミール風の名をもつ註釈者については、詳細は不明であるが、註釈の内容から紀元後7～8世紀頃の人物である可能性が高く、『チャラカ・サンヒター』だけではなく、『スシュルタ・サンヒター』(*Suśrutasamhitā*)への註釈書も著していたことが、その写本断片の存在によって明らかとなっている。またインド・ケーララ州には、真偽は不明であるが、ジャッジャタはインド医学の古典的文献の一つ『アシュターンガ・フリダヤ・サンヒター』(*Aṣṭāṅgaḥṛdayasamhitā*)の作者ヴァーグバタ(*Vāgbhaṭa*)の直接の弟子であったという伝承が残っている。

今回の発表では、まず『チャラカ・サンヒター』の註釈文献を概観した後、ジャッジャタ作『ニランタラパダ・ヴィヤーキヤー』の主にマラヤーラム写本によるテキストに基づいて、同註釈と『チャラカ・サンヒター』のカシミールにおけるテキスト伝承との関係や、チャクラパーニダッタなど『チャラカ・サンヒター』の他の註釈者たちとの関係について扱う予定である。

主な交通機関

主要鉄道駅	利用交通機関等	乗車バス停	市バス系統	市バス経路	本学までの所要時間	下車バス停
JR/近鉄 京都駅から	市バス	京都駅前 (停留所案内)	206系統	「東山通 北大路バスターミナル」行	約35分	京大正門前 又は百万遍
			17系統	「河原町通 錦林車庫」行	約35分	百万遍
阪急 河原町駅から	市バス	四条河原町 (停留所案内)	201系統	「祇園 百万遍」行	約25分	京大正門前 又は百万遍
			31系統	「東山通 高野・岩倉」行	約25分	京大正門前 又は百万遍
			17系統	「河原町通 錦林車庫」行	約25分	百万遍
			3系統	「百万遍 北白川仕伏町」行	約25分	百万遍
地下鉄 烏丸線 烏丸今出川駅から	市バス	烏丸今出川	203系統	「銀閣寺道・錦林車庫」行	約15分	百万遍
			201系統	「百万遍・祇園」行	約15分	百万遍 又は京大正門前
地下鉄 東西線 東山駅から	市バス	東山三条	206系統	「高野 千本北大路」行	約20分	京大正門前 又は百万遍
			201系統	「百万遍 千本今出川」行	約20分	京大正門前 又は百万遍
			31系統	「修学院・岩倉」行	約20分	京大正門前 又は百万遍
京阪 出町柳	徒歩	(東へ)			約20分	
	市バス	出町柳駅前	201系統	「祇園 みぶ」行	約10分	百万遍 又は京大正門前
			17系統	「錦林車庫」行	約10分	百万遍

